
転生！？ギーシュ・ド・グラモン珍道記

ケース

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

転生！？ギーシュ・ド・グラモン珍道記

【Nコード】

N3985M

【作者名】

キース

【あらすじ】

バイクの事故で死んだはずの青年が何の因果かゼロ魔の世界に転生されました。しかも女好きで有名なグラモン家の四男坊ギーシュ・ド・グラモンに生まれ変わり、原作知識と御馬鹿な性格でハルケギニアの世界を練り歩き混乱を生み出していきます。

さて、彼はこの世界で何を見て、何を残すのか？それとも何も残さないのか？

今、一人の馬鹿がハルケギニアの世界に挑戦します。するのか？

プロローグ（前書き）

はじめまして、初投稿です。

日々の仕事の疲れとストレスをSS等を読んで癒されていましたが、読んでいるうちに自分も書いてみたくなり投稿させていただきました。

まず、私こと作者は小学生の頃から作文や小論文が苦手で、誤字脱字などありましたらご容赦ください。もし誤字脱字を発見されましたら、指摘してください。喜び勇んで直します。

そして、この作品は色々な漫画や小説等クロスします。

ただ単に作者の趣味と愛と独断と偏見です。温かく見守って下さると嬉しいです。

最後に、クロスさせるにあたり、wikiなどで調べたりしますが、それでも知識が足りなくなるかもしれませんが、こちらもご容赦ください。

プロローグ

俺、渡部 明は空を飛んでいた。

友人達と日帰りツーリングした帰り、目の前にキツネが出てきた。キツネをかわしたがいいが、バランスを崩し転倒したようでよく覚えていないが、痛みより、（熱）と感じた。

空を飛びながら月が見えた。

「・・・きれいだねー」と 渡部 明 最後の言葉を言った。

文字や言葉で表現できない衝撃とともに 渡部 明 の人生は終わった。

地球での人生は

f i n ?

ハルケギニア トリステイン王国

深夜、グラモン家の屋敷に赤ん坊の泣き声が鳴き響く。

「旦那様！、旦那さまー！！ お生まれになりました！！ 元気な男の子です！！！」

「生まれたか！ まさか4人目まで男の子だとは、これもグラモンの軍人の血か。」

・・・一人くらい娘がほしかった。 ハァー・・・」

そう言って男性は軽く俯きながら部屋をあとする。

「あなた、生まれましたわ。元気な男の子です。」

「我が妻よ、ご苦労様。そしてありがとう。」

男性は言い終わると女性の頬にキスをする。

「あなた、それでこの子の名前は？」

「ふむ。女の子がほしかったから、女の子の名前しか考えていないな」。マリア、ベアトリーチェ、ラベンナ、サンドラ、リリアーヌ……」

「……あなた、私の記憶ちがいではと思いますが、今仰った名前はあなたが今まで浮気した女性の名前だと、オ・モ・イ・マ・ス・ガ？」

瞬時に女性から怒気が立ち昇る。

「っへ？ あ、あー 男の子な名前だったな！？ うー ガ、ギ、

ギ、グ、ギー……」

「ギー？」

「そうだ！この子の名前はギーシュだ！ギーシュ・ド・グラモン！
！！」

威容にイケメンな外人のオッサンが俺を抱き上げながら

「この子の名前は、ギーシュ。ギーシュ・ド・グラモンだ！！」と叫んでる。

（なんだー？このオッサン、日本語上手いなー、それにでかいなー、俺は170センチはあるんだぞ？……あん？なんか体がおかしい？……あれ？アレエエエエ！?!?!）

そこで、体の異変に気づいた。

（なんじゃあこりゃああああ！！？ あ、赤ちゃんになってるううううう！！?!?!）

俺は、某体は子供、頭脳は大人な探偵じゃねえええぞ！（そこには、鏡に写るイケメンのオッサンと、赤ん坊の姿であった。

朝方、俺は赤ん坊のような柵付のベットで寝かされていた。どうやら、いつのまにか寝ていたようだ。

（さて、俺は渡部 明なはずだ。それがなんで赤ちゃんになってるんだ？ しかも

俺のことを、ギーシュって呼んでたよなー？ ギーシュって確か・ゼロ魔の女好きな馬鹿じゃなかったっけ？）

一眠りしたお陰か、冷静に物事を考えられるようになっていた。

ギーギョルル

腹の底から物凄い音がした。

（あー、腹が減ったー。おーい、早く起きろー。可愛い赤ちゃんが腹減らしてんぞうー）

俺は部屋中に響くほど大声で泣き喚いていた。

「はいはい、オシメかしらオッパイかしら。男の子はやっぱり元気ですわね。」

俺の鳴き声でたたき起こされたにも拘らず、母親らしき女性は慈愛の眼差しを俺に向けていた。どこの世界でも母親とは一緒のようだ。（ハアー、まさかこの年で母乳プレイをするはめになるとは・・・って、俺って今赤ちゃんじゃん！ プレイじゃないじゃん！！ ジャンジャン！！・・・ツマンネー）

独りで馬鹿なことを考えているこの赤ん坊は、どこの世界を探しても今一人しか見つからないであろう。

母乳を飲み、オシメを換えてもらった赤ん坊はスヤスヤと寝ていた、表面上は。

（とりあえず、俺はギーシュ・ド・グラモンなのかー。つーことは、15、6年後には才人が来て、大冒険が始まるんだなー？ まったく、小説にハマってよかったねー。こんなことなら、アニメもちや

ん」と見ときゃよかったな……。うふ、うふふふ！ぐふふふふ
っ！！

さーで、楽しい楽しい第2の人生か。おもいつきし楽しむとします
かー！！）

フワアアアーフウー

赤ん坊の体が睡眠をほしがって、欠伸をした。

（やべーねむいー、したら寝るかー。あー、早く成長しねーかなー。
）

そうして赤ん坊は深い眠りについた。

この時、この赤ん坊は自分を中心に世界が、原作とは異なっていく
ことはまだ知りようもない。運命の歯車にく彼>という歪な歯車が
組み合わさって。

カチ、カチ、カチ、ツギギ、カチ、カチ、カチ……

バカが学院にやってきた!?

トントン

部屋の扉がノックされている

「若様、起きて下さい。若様?」

ガチャ 扉を叩いていたメイドが部屋に入ってくる。

「若様、今日はご出立の日です。いいかげん起きて下さい。」

「うー、だーかーらー朝起こすときは、静かに エラで・・・」

「潰しますよ?」

俺は瞬時に起きた。

「ごめんなさい! 起きました!! 冗談です!!! だ、だから・・・
アイアンクローは・・・
いや、イヤアアアアアアアア!!!」

朝の身嗜みを整え、朝食を食べに部屋に入ったら父親がいた。

「おはようギーシュ、またスゴイ声だったな?」

「おはよう親父、・・・顔に手の跡がついてんぞ?」

そう、父親の顔にも俺と同じ跡がついていた。

「うむ! 朝寝ぼけて抱きついたからな!! 目覚ましにアレはい!!!」

「朝から何男二人で、馬鹿話をしているのかしら? おはようギー

シュ、おはよう貴方。」

俺の後ろから母親も入ってきた。

「おはよう、母上」

俺は朝の挨拶もそこそこに席に座ろうとした。そこに、

「なあギーシュ、長年の疑問だったのだが、なぜ私には父上と呼んでくれないのかね?」

「そりゃー、なんとなくだよ。親父」

俺はそう、そっけなく答えた。

「ハアー、ギーシュがそう呼びだしてから、上の三人まで真似をして。父上と呼ばれていた頃がなつかしい」

親父が黄昏ているなか

「ふふ、朝食をすましたらギーシュのお見送りですわよ。元気を出してくださいな。」

そう、今日はトリステイン魔法学院の入学式の前日。待ちに待ったときがきたのだ！

今の俺のテンションだったら、コンペイトウに核弾頭を撃ちこめに逝ける！！旧ザクで！！

屋敷前の広場に俺と両親、メイド達、そしてグラモン領の平民の子供達が集まっている。

「リーダー、魔法学院に行っても俺たちのことを忘れないで下さいよ？」

「学院で貴族の馬鹿息子なんてシメちまえ！」

「んー？それってギーシュの兄貴もシメちゃうのか？」

「そうか！ よし、みんなやっちまえ！！」

「だめ！ギーシュさまは私と結婚するの！！　そして私も貴族に・・・うふふふ」

「そんな！？メアリー、僕の気持ちは・・・」

「トム、あきらめろ。な？」

「とりあえず、ギーシュを殴ろう！！」

「賛成！賛成！大賛成！！」

「ヒヤッハー」

「・・・馬鹿ばっか」

俺を取り囲んで騒ぐ気のいいやつらを見て両親が微笑んでいる。いや親父だけ複雑な顔をしていた。

「まったく、ギーシュも変わっているがこの子たちも変わっているな！。貴族と平民というのは・・・」

「あらあら、よいではないですか。ギーシュも皆さんも本当に楽し

そうなのですから」

両親がほのぼのしているのを他所に、俺は皆に追い掛けられていた。

「ぜえぜえ・・・ふー　よし！そろそろ行くぜ！」

俺はメイドから渡されたタオルで汗を拭きながら叫んだ。

「うむ、道中気をつけるんだぞ。あと、この私がデザインした服を持っていけ。」

「そんなヒラヒラした服なんて着れるか！」

また落ち込んでいる親父を放っておいて、一人のメイドが、

「若様、再度確認いたします。水辺には絶対に近づかないで下さい。

お風呂も長湯はしない・・・」

「わかってるよ、それは俺が一番わかってるから。」

「ならば結構です。」

安心したのか素直に引き下がるメイド。入れ替わりに母上が、

「そういえばギーシュ、貴方、学院までどうやっていくの？あのスゴイ音がする乗り物でいくのかしら？」

「いや、今日はあいつに乗っていくよ。・・・単車はちょっとね？」

そう、このハルケギニアの世界で俺はバイクを発見した。なんとグラモン家の蔵、というか日本の一軒家二つ分の大きさの納屋にあったのだ！発見した時は思わず、歓喜の涙を流した。どうやらご先祖様が集めたものらしい。

中に在ったのは、壊れたデリオ、エンジンの無いゼファー、そして完全な状態で走行可能なRZ350！あのナナハンキラーがあつたのだ！！固定化の魔法が掛けてあるので保存状態もよし！魔法万歳2スト最高！！！！

俺は懐から小さな笛を取り出し、思いっきり吹いた。

ピュイイイイイイーーーー

屋敷の近くの森から一匹の幻獣、グリフォンが飛んでくる。俺の側に着地したグリフォンを撫でながら、

「よう、バド。今日は頼むぜ?」

「ギユワ、ギユワ。」

俺が子供の時にひろったこのグリフォン。何でも数百年に一度しか生まれない金色の爪をもつレアなグリフォンらしい。母上におねだりし、親父を脅して飼うのを認めさせた。名前は俺の趣味、いいだる別に。

「荷物はそれだけなのか? 私が学院に入るときは馬車三台分はあったぞ?」

いつのまにか立ち直っていた親父が尋ねてきた。

「ああ、何か必要だったら取りにくるさ。それと親父わかつてるよな?俺がいないからって、またツケや借金をするなよ? あと、店の経営・・・」

即座に、メイドが応える。

「ご心配ありません。私がきっちり見張っています。」

「なら、平気だな。」

俺はグリフォンに跨り、見送る皆の顔を見た。

「母上、そして父上行ってきます。そんで・・・行ってくるぜ! ヤロウドモ!!」

「うおおおうう!? 妻よ、聞いたか!? あの、ギ、ギーシュが私のことを父上と・・・!?!」

「はいはい、よかったですね」

親父が泣き出した。サービスしすぎたかな? それを見て微笑んでいる母上。

「リーダー! 道中気を付けて下さい。」

「彼女なんか作んなよー。作ったら殺しに行くかなーマジで。」

「お土産忘れるなよー」

「途中で落ちろー」

「ギーシュさま、花嫁修業をしながらお待ちしております。」

「メアリー、僕は・・・」

「トム、もう無理だ。」

「ヒヤッハー」

「・・・気を付けて・・・」

俺はグリフォンを飛立たせ、屋敷の上空を旋廻し、一路トリスタニア魔法学院に向かった。

トリスタニア魔法学院に向かう街道の上空を一匹の幻獣、グリフォンが飛んでいる。

「ふわー、空の旅もやっぱいいもんだねー。のんびりまったり天気もいいし最高だねー、お前もそう思うだろ？バド」

「ギユワ！」

バドを撫でながらそう呟いて何気なく下の街道を見た。

「お、あの馬車の紋章は・・・」

俺はバドを降下させ馬車に近づいた。

「おい、マル！マールー！！」

「マルじゃない！僕の名前はマリコヌルだ！！・・・ってなんだギーシュか。いい加減にその呼び方はやめてくれ。」

「いいじゃん別に。俺らはダチコウじゃん！」

「ハアー、学院でも君がいると思うと、また面倒なことが起こると僕は確信できるんだよ・・・」

「褒めても何もでないぜ？」

「褒めてないよ！だいたい、その髪型はなんだい？あとマントも？マルもといマリコヌルは俺を変なモノを見る目で見つめてくる。」

「イメチェンだよ、イメチェン！高校デビューはイメチェンの時期だよー！！」

「コウコウデビュー？なんだいそれは？」

「違った、学院だよ。魔法学院デビュー！」

今の俺の姿はヒラヒラした服でもないし、ふわつとした髪でもない。学院指定のシャツを第二ボタンまで開けて、全ての髪の毛は天を穿つトンガリヘアー、そしてマントの裏地にはバイオリン観音鯉づく

しの刺繍入り。本気の兄貴、背中のモンモン借ります。

「っと、見えてきたぜ。トリスタニア魔法学院だ。ふっふっふっ、楽しい学院ライフになるといいなー。なあ、マル？」

「・・・僕はもう実家に帰りたいよ、ハア。」

項垂れているマルを放っておいて、俺は一人ワクワクしていた。

「待っているよ？ 大冒険！ ギャハハハハハハハハハハ！」
「ハアアアアアアアー。」

また、溜息をだすマルもといマリコヌル。

エンディング

【バカ・ゴー・ホーム】

バカが学院にやってきた！？（後書き）

ゼロ魔のwikiで、ギーシュの紹介の所でキャラクターCDなるものにグリフォンを飼っていたとあったので、ニコニコやyoutuで探したのですが見つからなかったです。よって、作者の趣味でやっちゃいました。グリフォンの名前を考えていたとき、これしかないなと。気分は内海さんです。

あとは、マントの刺繍のネタ、知ってる人はいるのでしょうか？このネタ元は俺の聖典です。分かってくれる方がいてくださったら、作者は本望です。

馬鹿と青赤コンビと金髪と

翌日、アルヴィーズの食堂 入学式

2階から落ちてきたオスマンのじいさんを見ながら

「相変わらず、あのじいさんはファンキーだなー」

と俺は呟いた。それに反応したのは隣に座ったモンモランシーだ。

「あら？ ギーシュ、貴方オールド・オスマンを知っているの？」

「ん？ ああ、うちの顧客だからねー。」

客という言葉に嫌悪の反応をするモンモランシー。

「あの商売まだやっているの？ 貴族なのだからいいかげんに、終わりにしたら？」

「しかたねーだろ？ うちのクソ親父が作った借金はまだあるし、新しい商売を始めたから、まだまだ金はいるんだよ。」

ここで話されている商売とは銅像売りである。が、ただの銅像ではない。

俺の知識とグラモン領の土メイジ達総力で作ったフィギュアである。ラインナップはメイド系、リリカル系、ガイナックス系の女性キャラ総出演である。最初の言葉に【淫らな】とつくが。最初はトリスティン貴族に細々と売っていたが、次第に話題になり今ではゲルマニアからも注文がくるほどだ。まったく、どこの世界でも人気があるもんだ。

「つと、なんだか騒がしいなー？ なんだー？」

「あそこみたいね。あれはヴァリエールの・・・」

モンモランシーが見ている方向を向けば、騒いでいる赤髪と桃髪、そして黙っている青髪。

（見つけた 見つけた 主要キャラども 来年が楽しみだねー。ケ
ーケツケツケツ）

俺はもの凄い笑顔になっているのだろう。その顔を見たモンモランシーは、

「・・・ギーシュ？　今凄く悪い顔してるわよ。まさかあの三人に！？」

「あー？　なんだよ、心配するなって？　俺がハニーって呼ぶのはお前だけだから。」

「どうだか。お父様からグラモン家の男は信用するなって言われているんだから。」

つと、そっぽを向くモンモランシー「ハニー」。

（まったく。グラモンだからって信用ねーな。それにしても可愛いねーハニーは。）

俺がこんな風になってしまったのは単純だ。一目惚れしてしまったのだ。それとも原作のギーシュの魂が求めたのか？　まあいいや、俺は惚れちまったのだから。

出会いはガキの時、両親がどこぞの貴族に会いに行くのをめんどくさがった俺も強制連行で連れ去られ、行った先がモンモランシ領だった。開拓に失敗したハニーのパパを慰めにきたらしい。

モンモランシの屋敷で出会った瞬間【ビビッ！】ときた。クルクルした金髪ドリル、子供ながらキリツとした眼、そして、かまってくれなきや寂しいオーラ！。それからの俺は、両親がモンモランシ領に行くときは必ずついて行く、そこで今にいたる。

入学式も終わり数日後。

俺は昼飯を食い終わった後、イライラしながら中庭を歩いていた。

（ダー！！イライラする！！単車に乗りてー！！かっとなしてーなー！！！！　次の休みに取りに行くかー？　あーでもゼ口戦の前にハゲに見せても平気かなー？　あん？）

物思いに耽っていた俺の目の前に、決闘だ試合だの騒いでいる見知った貴族の馬鹿共と青髪の少女がいた。とりあえず、ストレス発散

のために馬鹿共に喧嘩を売ることにした。

「なんだなんだー？ 一人の女に数人で取り囲むなんて、いつからブルースクウェアの糞つたれ共は糞以下になつたんだー？ なあーヴィリエ君よー？」

その声に驚き振り向くヴィリエと取巻き達。

「な！？ 貴様はギーシュ！ 貴族の誇りも無いお前に関係ない！ドット風情が口を出すな！！」

「そのドットにボロ負けしたのは誰だつたかなー？ ヴィ・リ・エ・ちゃ・んよ？」

「！！・・・いいだろう！まずは貴様から倒してやる！！」

「そうこなくつちゃ。ククク」

俺とヴィリエは10メートルほど離れて対峙した。

俺は杖を抜く

「デメエ程度ならこれで十分だ。出て来い俺の玩具よ！」

そう言いながら、俺はゴーレムを錬成する。1.8メートルほどの濃いグリーンの鋼鉄のボディ、右肩にだけ付いたアーマー、そしてピンクに輝く可愛いモノアイ。旧ザクだ！

「さあ！殺ろうか！！」

俺は旧ザクに余裕をもって走らせる。

「そんな木偶人形、今度こそ吹き飛ばしてやる！ ウィンド・ブレイク！！」

風の魔法が旧ザクに迫るが、難なくかわす。そして、旧ザクを先ほどの倍の速さで走らせる。魔法をかわされ驚愕するヴィリエ。

「な！？ は、速い！？」

「素人め、間合いが遠いわ！！」

俺は言い終わると同時に、旧ザクの必殺技<ショルダータックル>をヴィリエにぶちかました。

「っごえ・・・！！」

変な声を出して3、4メートルは吹っ飛ぶヴィリエ。立ち上がろうと

するが胃の内容物を吐き出してそのまま倒れた。昼食は Pasta だったようだ。

「しっかりしろヴィリエ！」

「大変だ！泡吹いてる！！」

「メディック！メディック！メディック！！」

ヴィリエの周りで騒ぐ取巻き達。レベテーションでヴィリエを医務室に運ぶようだ。

「「「憶えている！」「」」

そう言っただけで逃げ出す馬鹿な取巻き達。お約束ありがとうございませう。

「H A H A H A、俺 is 最強！イデッ！？」

後ろを向くと青髪の少女タバサがいた。持っている杖で頭を殴られたようだ。とり合えず、抗議しよう。

「いてーな！何すんだよ！？」

「・・・やりすぎ。」

どうやら説教されているようだ。俺はすかさず言い返す。

「いいんだよ！あのバカもこれで少しは懲りたろ。」

「・・・どうして？」

「どうして？ あー、俺が何であのバカにケンカ売ったかってことか？」

「・・・そう。」

次は疑問をなげける。

（しかし、本当に無表情やな！。こちよばしてみんなかな？・・・やめとこ。）

俺は湧き上がる好奇心を押し殺し、真面目な顔で冗談半分に答えた。
「そりゃー、ストレス発散の為！それで、女の子に絡むバカはボコッていい国法があるから！」

「・・・そんなの無い。」

滑った。俺は落ち込みながら話を変えることにした。

「まあ、いいじゃん！ それに、あのブルースクウェアのバカとは前からケンカしてるしー。」

「・・・ブルースクウェア？」

私は何故このいきなり現れた男の頭を叩いたのだろう。

何故か体の底から『しなければならぬ』気がした。

貴族の子弟とは思えない言葉使いと態度、まるで平民の子供だ。いやチンピラか。

今、目の前の男はブルースクウェアの説明をしている。

「ブルースクウェアというのは、貴族の馬鹿息子共で構成されているチームで、ヴェリエの奴はその頭だったんよー。まあ、去年俺達ダラーズが潰したけどな。あー、ダラーズっていうのは俺が作ったチームで、貴族と平民のガキがダラダラ集まって遊びまくってるだけのチームだよ。皆いい奴、おもしろい奴だから。あーでもヤバイのが何人かいるけど・・・」

長々と話していたと思っていたら急に頂垂れ始めた。ブルースクウェアの説明から、いきなり自分達の話になり説明になっていないと思ったが気になることを話していた。

貴族と平民の子供が遊んでいる。そんな話などガリアでは聞いたことが無い。このトリステインだけの話だけなのか？ゲルマニアでは？答えの出ない問題を一端保留にして、私は彼が腰に付けている“杖”らしきものを見た。

それは全てが金属でできた平民が使う“銃”のように見えた。

「ん？ これかい？ へー、“こいつ”に興味があるんだ。」

そう言いながら、私の目線の高さに持ち上げた。

「こいつは“S & W M O D A 7 H A T E S O N G”て云うんだ！へーん、すごいだろ？ここにナイフも付くんだぜ！」

何がすごいのかまったく分からない。そのまま、私が黙って見ていると

「むー、これの凄さが分からないかー。残念やなー」

「・・・何故平民の武器を杖にするの？」

私がそう疑問を口にするのと、

「魔法が使えなくなったらそのまま武器になるじゃん？ まあ、あとは俺の趣味だね なによりカツコイイじゃん！」

確かに理に適っている。私も何度か杖での接近戦を経験しているから理解できる。それが“銃”ならなおさらだ。

「さて、邪魔しちまったようだし俺は行くわ。じゃーなー“タバサ”ちゃん！」

と、歩き去っていく。まだ、尋ねたいことがあるのに。
はて？ 私は何時名前を名乗ったのだろう？

（やべーやべー、つい名前を呼んじまった。気を付けとかねーとな
さーで、どうすつかなー？ ハニーのところでも行くか？それともマ
ル達のところにすつかなー）

俺は廊下を歩きながらどう暇を潰すか考えていた。そこに後ろから
声をかけられた。

「あら、さつき決闘してた方じゃない。 フフ ねえ、お名前を
教えてもらえるかしら？」

「あ、あーギーシュ・ド・グラモンだ。それで貴方は？」

振り向き返事をする。そして目に入るのは、派手だが美しい赤髪、
意思の強そうな目、このトリスタニアでは珍しい褐色の肌、そして
男のロマンを掻き立てる見事な巨乳！ ああ、谷間が素晴らしい！！

「フツツ。 キュルケよ。キュルケ・アウグスタ・フレデリカ・フ
オン・アンハルツ・ツェルプストー。名前から判るとおりゲルマニ
アからの留学生よ。」

俺は谷間から目を離しキュルケの顔を見た。

「ゲルマニアのツェルプストー家ならよく知ってるぜ。戦争が始ま
りや真っ先にヴァリエール家とドンパチするからな。」

「あら、よくご存知ね。」

「一応、軍人の家系なんでね。」（原作読んでたもん。当たり前じゃん）

「グラモン家ならこっちでも有名よ。一族の男は全員女好きってね。」

「グハッ！」

俺は精神的ダメージにより倒れかける。

まさか、ゲルマニアまで汚名が広がっていたとは、怨むぜご先祖様あとクソ親父。

「ププツ！大丈夫？」

「だ、大丈夫だ。そんで？ その女好きなグラモンの息子になんかようか？」

「決闘を見たのよ。そして貴方に『微熱』が反応したの。どう？ 今夜私の部屋でワインでも飲まない？」

俺は返事に詰まった。確かにキュルケに近づくメリットはある。しかし、二人つきりはまずい。いくらキュルケが本気で男として見てないとはいえ、非常にまずい。

俺はどう返事をしたらいいか迷っている中、キュルケの後ろ、廊下の曲がり角に金髪ドリルがピョコつと出ているのを発見した。

（ああ、ハニーは可愛いな！。あんなところに隠れてバレてないと思ってるな！。

あ！ いいこと思いついた！！）

なによ？ さつさとOKしなさいよ。このあたしが誘ってるのよ？

フツ、それともあたしの魅力が強すぎるのかしら？ まったく

罪な女だわ。

どこの国でも男なんて全部一緒。あたしが一声かけるだけで、フラフラ寄ってくる。

今日の前にいる男だって女好きで有名な家系だし、すぐに堕ちるだろう。もうこれで何人目だったか？ 七人目、いや八人目だったか？

「残念だが、誘いは遠慮しとくよ。」

「じゃあ、私の部屋に・・・って？ エエッ!？」

「なんで!?! なんて誘いに乗らないの!?! もしかしてこいつってゲイな人!?!」

「な、何故かしら? 理由を聞かせてもらえる?」

「ああ、今教えてやるよ。」

「ニヤリと笑いゲイ? な男は何故かあたしの後ろに歩いていく。足音を発てないように。もし本当にゲイだったらダッシュで逃げよう。そして二度と近寄らないようにしよう。」

「こつそりと曲がり角に近づいたと思ったたらいきなり手を突っ込んだ。キヤッ!?!」

「悲鳴と共に一人の金髪の女性が肩を捕まれながら出てきた。よかったゲイじゃなかった。」

「ジャジャーン! 紹介するぜ、俺のハニーだ!!!」

「ちよつと、ギーシュ!?! なにするのよ!?!」

「どうやら立ち聞きしていたようだ。とりあえず、からかうことにしますか。」

「あら、トリステインの淑女は人の話を立ち聞きするのが作法なのかしら?」

「ち、違っわよ! ギーシュが貴方の誘いに乗るなんて、す、少しも思ってないんだから!」

「訊いてないことまで話す目の前の女性とさっきからニヤニヤしている男。なんだこの二人?」

「だいたい、ギーシュが・・・フグッ!?!」

「・・・え?」

「今、あたしの目の前で行われているのはなんだろう? 金髪の女性が話していた途中で、いきなり男のほうで女性の唇にキスをしだした。しかも強引に舌を絡ませている。」

「ピチャピチャと廊下に響きかせながら、五分ほどたって女性が立っ
ていられなくなったのか尻餅をつく。すかさず男がお姫様ダッコで抱上げ」

「じゃーねー」

ニツコリと笑いながら去っていく。

今のは何だったのだろう？

あたしはしばらく呆然としていた。廊下の窓は開いていないのに何故か北風が吹く。

今日はもう寝よう。

（んー？上手く誤魔化せたかなー？ ふんふん、にしてもハニーはいい香りやなー、襲っちゃいそうだなー）

俺はハニーの部屋に向かって歩いていった。お姫様ダツコしながら。途中誰にも会わなかったのは今が授業中だからである。ハニーは俺の腕の中でずっと黙って俯いている。

（やつぱ、無理矢理キスしたの怒ってるかなー？でもなーキュルケから逃れるにはアレがいいと思ったしなー。あーでも、ハニーの唇はやばいなー。マジで押し倒しそうになっちまったし。・・・今夜のオカズはこれだな！）

と、アホなことを考えているうちに部屋の前に着いた。ここで問題が発生した。両手が塞がっているので杖を抜いて“アンロック”の魔法もドアノブも回せない。ハニーを下ろせばいいのだが、そんな勿体無いことができるか！！

俺は仕方無く、

「ハニー？ ドアを開けてくれると嬉しいんだけど。」

黙ったまま杖を取り出し魔法を唱えドアを開けてくれるハニー。そして部屋に入った瞬間ハニーが付けている香水と同じ匂いがした。部屋の中は女の子らしく綺麗に整えられている。ちなみに、俺の部屋は入居三日目にして腐海の森となってしまった。王蟲はいないが、俺が趣味で集めた書物や小物、武器や鎧が乱雑に置いてあり、メイドが掃除できなくなってしまったのだ。

俺の部屋の話はほっというて、今はハニーをどうするかだ。

とりあえず、ベッドの上に座らせる。そしてハニーの目の前で土下座をする俺。

「ごめん！あんなところで無理矢理キスをして！でも、ハニーを思う気持ちはマジだから！！」

「……」

俺の謝りついでの告白になんも反応しないハニー。本当に嫌われたかな？

「本当にごめんな。」

「……」

「それじゃ、そろそろ行くよ。このままいたら、ハニーのこと襲っちまいそうだし。」

俺が部屋を出ようと振り向いたとき、後ろから小さな声が聞こえた。
「……わよ。」

「へ？」

ハニーの方に振り向くと、顔を真紅に染めながら

「ギ、ギーシュになら、お……襲われても、うれし……」

「ハアアアアアニイイイ！！！！」

俺はハニーが言い終わる前にルパンダイブでハニーに襲いかかった。
「キャッ！！」

ハニーは俺に押し倒されて真っ赤になりながら

「あ、あの、ギーシュ。私、その……初めてだから……やさしく……して。」

「ああ、俺も初めてだから気にすんな。」（この人生ではね）
昼下がりの魔法学院に一匹の狼の遠吠えが鳴り響いた。気がする。

授業中の教室

風の使い手ギトーによる、とても為にならない話を聞き流しながらマリコヌルと数人がコソコソ話している。

「なあ？ギーシュとモンモランシーどこいったんだ？」

「昼食後、見てないな。」

「ヴィリエをぶっ飛ばしたの見たぞ。」

「そのあとは？」

「知らん。」

「・・・まさか二人で“ヤッテル”なんてな？」

「まさか！あはははは・・・」

「」「」「だとしたらぶっ殺す！！！！！！」「」「」

今日も平和な魔法学院の一日でした。めでたし。めでたし。

馬鹿と青赤コンビと金髪と（後書き）

どうも！

次話投稿に一ヶ月近くかかってしまいました。もうね、仕事がやばすぎて書く暇がなくて少しずつ書き溜めていたらこんなに経ってしまいました。

そして、気づけばアクセス数が一万突破していました。本当にありがとうございます。お気に入り登録された方も本当にありがとうございます。

これからも粉骨砕身書き連ねるので、見てください！お願いします！

戦う先輩と舞踏会

新人生歓迎の舞踏会。

貴族の嗜みとして社交界にデビューするための練習として、または、上級生が新人生に貴族の“格”を見せる場所であった。

の、だったはずが

「なにやってるマリコヌル！お前の腹は見掛け倒しか！！」

「おい！あの青髪の新人生凄いでしょ！？いったい何人前食ってた？」

「ギーシュ！有り金全部お前に賭けたんだからな？死んでも勝てよ！！」

「ギーシュ！勝ったらご褒美よ」

そう、彼らは挑戦していた。己の自身と胃袋に賭けて。

「も、もうだめだ。・・・うぷ」

また一人、“挑戦者”マリコヌルが倒れた。

マリコヌルを合わせ、すでに十数人の屍が会場内に倒れていた。

「ムグムグ。やるな！タバサちゃん！大食い俺について来れたのは、君が初めてだよ。

ングング、もし俺に勝てたら“ギャルソネ”の称号をあげるよ！」

「・・・いない。」

「にしても、ズズー、この鶏のソテーは絶品やな！　おかわり！！」

「・・・おかわり。」

そして、一騎打ちになり会場はさらにヒートアップする。

彼らの伝説は始まった。

「だー！食ったー！そんで負けたー！！」

会場の隅の椅子にだらしなく座り腹をポンポンと叩いている。

「ちよつとギーシュ！オジサンくさいからやめて！」

俺の右隣に座る金髪ロールの女性が窘める。

「うつ！？　ごめんよハニー。」

（はあ、前世も足したら俺ももう四十か。・・・オッサンだな）
「というか、なんでギーシュは毎日あんなに食べているのに太らないんだ？そして、なんでこんなイベントになつていたんだい？」
左隣に座り元より大きな腹をさらに大きくしたデブ、マリコヌルが疑問を口にする。

「デブじゃない！ポツチャリ系だー！！」

「なにいきなり叫んでんだ？」

「わからない、なぜか急に・・・で、なんでだい？」

「あー、俺が太らんのは体質で、」

「ズルイ。」

「・・・なんでイベントになったかという、あの妙な先輩の所為じゃね？」

まず最初は、俺がタバサを発見し勝負を挑んだ。

普段の食堂での食いつぶり、あれを見てしまったら勝負するしかないだろう。

俺自身、大食いには自信もあつた。負けちまったが。

そこに現れたのが、

「勝負？ むわああかして！！」

どこからともなく、中指だけを起てメガネに黒髪ロン毛の男と学ランに下駄の男が現われた。二人ともマントを、いや学ランの方だけ唐草模様の風呂敷を付けている。

「げ！？トサカだ！？」

「こらこら、先輩を呼び捨てにするやつがあるか。」

と言いながら呼び捨てにした2年生にコブラツイストをかける。

「うむ、皆のものの準備を始めるのだ。あーるは米を炊け。」

そう言われ準備を始める人たち。

その間、俺は呆然としていた。

「しかし、何でここにいたんだろう？ ここ春風高校じゃないよ

な〜？」

その後、二人は轟天号に乗り壁を突き破ってどこかに行ってしまった。他の生徒、教師までもが、いつものことだという顔をしていた。「何ぶつぶつ言っているのよ。それよりギーシュ踊りましょ！」

いつのまにか、雅やかな音楽が流れ始め、上級生が新入生の女の子にダンスを申し込んでいた。新入生の男どもは気の弱い奴は壁の一部になり、勇気のある奴らは上級生のお姉さまに申し込んでいた。「よっしゃ！食後の運動といきますか！」

立ち上がり、モンモランシーをエスコートしようとしたら

「いいなー。ハア」

マリコヌルが後ろで溜息をついている。

「なんだよマル、お前もいけばいいだろ？そんで玉砕してこい。」
「つて、玉砕は決定なの！？」

「まあ、わからんけどな。とりあえず男だったら突撃あるのみ！自分を信じるな！俺を信じる！お前を信じない俺を信じる！」

「結局だめじゃないか！！」

俺とマリコヌルがギヤーギヤー喚いていると、天使が舞い降りた。

「しょうがないわねー。ギーシュの後で少しなら踊ってあげるわよ。」

その言葉にピタツと止まる二人。

「本当かい！？モンモランシー！？」

「えー！？ハニーが、んなことしなくていいじゃん！」

感動し涙を流す馬鹿と文句をたれる馬鹿。

「私は早くギーシュと踊りたいの！そのためなら、少しでもなら慈善的なこともするわよ。」

「う、なんだか無性に悲しいよ。シクシク」

モンモランシーの言葉で天国から地獄に落ちるマリコヌル。

「ほら、行きましょギ「キヤアアアアアアアア」シュ。つて今度はなんなのよ！？」

俺はいち早く事態を察知し悲鳴がしたほうに視線を向け、

「ウツヒヨウー！」

感嘆の声をあげた。

「なにが・・・って、なあああああ！？」

モンモランシーは驚愕の声をあげた。

二人の視線の先には、見事なプロポーションを惜しげもなく晒している赤髪の痴女、もといドレスをバラバラにされたキュルケがいた。

「眼福、眼福　ありがたや、ありがたや」

そう言いながら、パン、パンと拍手を打ち再度じっくり見ようとしたり

「って、ちよつとギーシュ！何じろじろ見てんのよ！！」

我に返り俺の耳を引っ張りながら抗議するモンモランシー。

「痛い、痛い！　ちょ、耳が裂ける！！イタツ！！　仕方ないじゃん！男の本能は理性ではムリだって！　なあ、マルもなんとか言ってくれ。・・・マル？」

マリコヌルに助けを求めるが反応は無く、振り向いたがすぐ側にいたはずのデブはどこにも見えなかった。

「あいつ、どこ行っただ？」

とりあえず、この場を離れようと一歩歩いたら

ピチャン

足元で鳴った音に恐る恐る視線を下げると

「んげえ！？」

足元には、赤い絨毯より鮮明な、赤い血溜りに倒れ付すマリコヌルがいた。

「うわー、ハーメルンのライエルみてえ。おーい、生きてるかー？」

爪先でつつんしてみるが、青い顔で鼻血を出し続けるだけで返事がない屍のようだ状態である。

「しょうがねえなあー。ハニー悪いけど、このデブ童貞を診てくれねえ？」

「・・・・・・」

モンモランシーからも返事がなかった。振り向き様子をみると、あ

さつてのほうを見てなにやらブツブツ呟いている。近くに寄り耳を側立ててみる。

「・・・やっぱり大きいほうが喜んでくれるよね。あの秘薬を験すときが・・・でも、もし副作用が・・・誰かを実験・・・あの子にしよう。あの子ならヴァリエールと違って問題無・・・」

「ハニー？ハニー！？」

「あら？なに、ギーシュ？」

慌てて肩を掴みこつちに向けたが普段の顔になっていた。

「いや、なんでもない、よ？」（聞き間違った？たぶん、いやそうに違いねえ！黒いオーラなんて出てない！気のせいだ！）

だが、幻想は現実の前にもろくも崩れ去る。

「そう。あ、ねえギーシュ。さっきのあの子は？」

「あの子って？」（やめて！本当に怖いからやめて！！）

「さっきのイベントで貴方に勝った青い髪の子よ。どこに行ったか知らない？」

「い、いや知らんけど。タ、あの子になんかあんの？」（勘弁してください！後生ですから！！）

つい名前を言いそうになったが何とかこらえて怯えながらも問い返す。

「うっん。なんでもないわよ」

にこり、と笑顔であったがその目が獲物を狙う鷹の目のようであった。

女は怖い。特に、恋する女の子はスングク怖い。

祭りの前の馬鹿騒ぎ

舞踏会の翌日の深夜、生徒も教師も寝入ってる時間に喧騒が生まれる。

「「ぶんぎやあああああああああー！」」

ヴイリエとトネだがイネだが知らんが、二人はキュルケの操る炎に黒焦げにされて悲鳴をあげていた。

その様子を塔の屋上から見ている集団がいた。

「あーあ、結局ギーシュの一人勝ちか。ドローなんてないと思ってたのに。」

「ケケケ、勝負に『もし』とか『なんて』などないのさ。ほら、掛け金寄こせよレイナール。みんなも。」（ま、ズルしてんだけどねああ、原作を知っているって得だなー。）

「チエツ。」

悔しそうにした後、1エキュー金貨を投げ渡すメガネをかけた少年レイナール。

それに続き他の少年たちも投げ渡す。顔面目掛けて投げる奴もいる。

「まいどまいど 後はマルとギツちゃんだな。マル掛け金よこせ。てか大丈夫か？」

「う、うん、大丈夫だ、よ。あれ？ いくら、だっけ？」

一日経っているが、まだ青い顔でふらついているマリコナル。思考もおぼつかないようだ。

「10エキューだよん」

マリコナルの間に、いい笑顔で答えることにした。

マリコナルからちよろまかし、最後の一人に声をかける。

「おーい、ギツちゃん。掛け金ちょうだい。」

「・・・ギーちゃん。」

ボケーと未だに炎の殺戮を眺めているギムリ。ガキの頃からの付き合いでギーちゃんギツちゃんと呼び合う俺達。ですが、なんだか様

子がおかしいです。

「どつたの？」

「・・・ほれた。」

「はい？」

「あのキルケって子に惚れちまった！俺のハートに火をつけられちまった！なあ、ギーちゃん協力してくれ！あの娘と俺がウエディングロードを歩むために！！」

ヤバイ、目がマジだ。

「えーと、うん。ま、まあ、がんばれや。 応援はするよ。 ・・・」

・一応。」

原作を知っていてもこんなときはどうすりゃいいんだ？

応援しても結局バットエンドは見えているし、なんとかあきらめてもらうか。

「あの一、ハニー？ ちょっと、相談があるんですがー？」

「・・・さか、あんな・・・強いなんて。どうや・・・のませる・・・」

・。そうだ！だれかメイドにでも頼んで料理に混ぜればいいんだわ。フフフ、明日を楽しみにしてなさいよ！オーホホホホ！！」

最初は聞こえない位の声だったのに、最後はどこぞの悪の女王のように高笑い。

ギムリの事で相談してみようと思ってたのだが、

だめだ、スイッチが入りっぱなしだ。

「ハアアア」

溜息をついていると、レイナールが焦りの表情でこっちに近づく。

「おい、ギーシュ。溜息ついてる場合じゃないぞ。あの二人がこっちに近づいて来る！」

「マジで！？ テメエラバツくれんぞ！ レイナールはマルを頼む。

おれはハニーとギツちゃんを」

「わかった。」

言い終わる前に返事をし、マリコヌルに駆け寄るレイナール。手隙

の奴らも逃げ始めている。残りの二人は事態が分からずボケーとしていた。

「ギーちゃん、なんで逃げるの？」

「こんなところで覗いてたつてばれたら、あの燃やされた二人のお仲間扱いだぞ？」

「あーなるほど。」

ポンッと手を打った後、慌てて逃げ出すギムリ。

「ほら、ハニーも！」

「え？ え！？」

モンモランシーの手を取り駆け出す。

程なくして屋上は無人となった。

キンコンカーンコン

「はい、それでは午前の授業を終わります。明日は火の魔法の活用とその歴史をやりますので、予習復習をしっかりとってください。」

頭が荒野のコルベール先生が授業の終わりを告げ教室から出て行く。それを合図に生徒たちも立ち上がり食堂に向かう。

「ふあああー。あーよく寝たよく寝た。さてメシにすつか。」

「まったく。よくあんだけ堂々と寝れるわね。ミスタ・コルベールも困ってたわよ。」

廊下を歩きながら小言を言うモンモランシー。その二人の後ろでは「しつつかし、昨夜は面白かったな。あのヴィリエの顔を見たか？」

「見た見た！面白すぎて夢に出るかと思った！」

「あの後、朝になるまで塔から宙吊りになってたんだとよ！」

「……ぎやははははは」

昨夜、一緒に見に行っていた仲間が昨夜のことで盛り上がっていた。そして、食堂の入り口に差し掛かったところで

「ちよつといいかしら？」

「へ？ げっ！？」

仲間の一人が振り向いた先には、昨夜ヴィリエ達を黒焦げにした張本人キュルケが立っていた。

「ミスタ・グラモンに用があるんだけど。」

その言葉と同時に仲間の視線がギーシュに集まる。

「おれに？」

「ちよつと、ギーシュ!？」

「あー、大丈夫だよハニー。先に行ってくれ。」

「う、うん。わかった。」

返事をし、他の仲間と共に食堂に入るモンモランシー。一度だけ振り向いたが、その目は怪我をさせたら許さないとキュルケには感じられた。

「場所を変えましょうか。」

「ああ、そうだな。」

誰もいない庭のさらに奥、人が滅多に來ない場所に二人が着いたらすでに先客がいた。

昨夜の主役のもう一人タバサがいた。

二人を交互に見ながら

「それで？ 俺に用つてのは？ まさか愛の告白!? でも残念！俺にはハニーがいるからあきらめてね？」

冗談にぴくりともせず白けた目で見るキュルケとタバサ。

この気まずい空気が永遠に続くかと思つた矢先、タバサが一步踏み出した。

「あなたは昨夜見ていた。」

「うへ!? まああんなだけ騒げばいやでも・・・」

「最初から気付いていた。」

「マジ!? スゲー耳やなー。」

タバサとのやり取りのあと、キュルケが動き出す。

「どうやらヴィリエの言うとおりみたいね。ミスタ、いえ、ギーシュ・ド・グラモン！」

今までの仕掛けはあなたが黒幕ね!!」

「ハアアアア!？」

「ヴイリエが全て吐いたわ!まったく手の込んだことするわよね? ドットがトライアングルを怒らせたらどうなるか、この『微熱』が教えてあげる!!」

「ちよつとま・・・」(あのクソボケ!最初からこれが狙い・・・)

「問答無用!!ファイア・ボール!!」

詠唱とともにデカイ火球が迫る。

「だあああ!？」

横っ飛びでなんとかかわし杖を抜く。

「あぶねーだろ!少しはこっちの話も聞けー!!」

「問答無用と言ったはずよ? もう一丁ファイア・ボール!」

「クソ! サンド・ウォール!!」

キュルケの火球と砂の壁がぶつかり火炎と砂煙が舞う。火炎は収まるも砂煙は未だ収まらず二人の視界を覆う。

「目晦ましのつもり? そんなのまとめて吹きとば・・・きゃ!？」

いきなりキュルケの足元の地面から四本の鋼鉄の触手が飛び出し手足を拘束する。

「ウインド。」

タバサが風の魔法で砂煙を払うと、三体のゴーレムを従えたギーシユが立っていた。

「ちよつと!放しなさいよ!!」

「ケツケツケツ!人の話を聞かない悪い子にはお仕置きが必要やな? 行け、アッグガイ!!」

「ヒイイイ!?! イヤアアー!!」

両腕に四本のヒートロッドをもつアッグガイ二体がキュルケに迫る。計八本の鋼鉄の触手がキュルケの体の上を怪しく艶かしく蠢く。

「イヤ!?!ダメ!!そこはまだ・・・誰にも触らせた事も・・・ウツ・・・ヒゲ・・・」

泣き出すキュルケを見て理性がほんの少し外れるギーシユ君。

「ギャハハハッ！！さーて、次はゴフエ！？」

「やりすぎ。」

前回よりも力をいれて殴ったタバサがギーシュの後ろに立っていた。

「ナ、ナイス・・・ツツコミ。」

倒れながらも賛辞を送るギーシュに持っている杖をおもいきり振り下ろすタバサ。

「トドメ。」

「ガフッ」

「・・・ヒグ・・・ヒグ・・・ウェーン。タバサ。」

「よしよし。」

泣いているキュルケをあやしているタバサ。とても微笑ましい光景です。

「えーと、したら誤解は解けたってことで？」

タバサ、そしてキュルケに殴られ蹴られ踏み潰され倒れ付したギーシュ。

「そんなわけないでしょ！待ってなさい！今燃やし尽くしてあげるから！！」

「待って。」

怒りの炎で燃え上がるキュルケをタバサが制す。

「彼は違うと思う。」

「そうそう！ちやいまんがな、ちやいまんがな。」

ギーシュの発言に、キツつと睨みつけるキュルケ。慌てて死んだふりをするギーシュ。

「それで？なんか理由があるの？」

キュルケの問いにうなづくタバサ。

「第一に彼の戦闘の動き。防御と目晦ましを同時に行い、尚且つあなたの位置を精確に突き拘束した。これは彼が戦闘に馴れている証拠。」

第二に彼はあなたを傷つけようとはしなかった。少し破廉恥な行動

だっただけ。」

「十分破廉恥で、外道だったわよ！」

そう言いながら視線をタバサからギーシュに移し睨みつけるキュルケ。死んだふりをしているギーシュはピクリともしない。

「第三に彼の魔法。この前のド・ロレーヌとの決闘で彼は不可視の風の魔法をかわした。そして、このゴーレム。ドットのメイジで鉄のゴーレムを創るのは無理。尚且つ、鉄の鞭でありながら相手の体に締め跡もつけない程の繊細な操作。少なくともラインの上位、もしくはトライアングルクラス。」

「なっ！？この変態が！？」

タバサの推測に驚くキュルケ。そんなキュルケにかまわず続けるタバサ。

「第四は、そこ。」

と、いい終わると同時に氷の矢を少し離れた茂みに放つ。

「うあああああ！？」

「あ！ ヴイリエー！」

悲鳴と共に転がり出てきた者の正体に再度驚くキュルケ。

「あん？ヴィリエだと！？」

今まで死んだふりしていたギーシュも起きだす。

「なぜここに？」

冷静に詰問するタバサ。三人に囲まれ冷や汗以上の汗をかいているヴィリエ。

「い、いや。き、君たちがギーシュを成敗すると聞いて・・・」

「あら？だれに聞いたのかしら？あたし達二人しか知らないのに。」

「そ、それ・・・は・・・」

キュルケの言葉にオロオロするヴィリエ。そして、タバサがトドメをさす。

「彼を殴っているとき聞こえた。『ざまあみるギーシュこの前の仕返しだ。』」

「な！？ まさか聞こえて！？」

「うそ。あのときは殴るのに夢中でなにも聞こえてなかった。」

「は、はめやがったなー！？」

激昂したバサに殴りかかろうとするヴィリエの前に二つの影が遮る。

「さーて、ヴィリエちゃんよー。覚悟はできてんだろうなー？」

「そうよね。しかも、こんな可憐なタバサに殴りかかるなんて親友として黙ってないわよ？」

笑顔で迫る二人に後ずさるヴィリエ。そしてニヤリと笑い同時に言い放つ。

「「ブ・チ・コ・ロ・シ・か・く・て・い・ね」」

「なあ、キュルケ。いやミス・ツエルプストー。訊いてもいいか？」
ヴィリエをボロ雑巾にした後、三人は食堂に向かっている。その道すがらキュルケにある事を尋ねるギーシュ。

「キュルケでいいわよ。それでなによ、ミスタ・グラモン？」

「ああ、なら俺もギーシュでいい。でだ、お前まだ処女な イデー
ー！」

「破廉恥。」

「なによ！悪いの？」

乙女の秘密に土足で上がり込むギーシュに、杖による鉄拳制裁をするタバサと秘密を知られ憤慨するキュルケ。

「イテテ。 いや、なんつーか以外だったから。」

「お生憎様。あたしは本物を求めているの。身も心も焦がす本物の情熱を！そこのボンクラ貴族の息子に許すわけないでしょ？」

との、キュルケの言葉に顔を見合わせ考え込むギーシュとタバサ。
答えが出たのか同時にポンと手を打つ。

「それはつまり、『初めては好きな人とじゃなきゃ、いやん』てことだな。」

「乙女チック。」

「え？ ちょっ！？ あゝもう！それでいいわよー！！」

二人の指摘に赤面しそつぽを向くキュルケ。そして、タバサはギーシュの方に顔を向けジツと見つめる。

「わたしも尋ねたいことがある。」

「ん？ な、なんだい？」（ヤベエ。俺またなんかドジツたか？）

「なぜ魔法の実力を隠していたの？」

「なぜ？と訊かれたら答えよう！そのほうがかつこいいからだ！」
某ブラボーな人のようにビシツとポーズを決め答えるギーシュ。

「そう。」

「馬鹿じゃないの？」

二人の感想にガツクリと肩を落とすギーシュ。

「あ！あたしも聞きたいことある！」

そんなギーシュを見て、気を良くしたキュルケは思い出したかのように質問をする。

「あゝ？ あんだよゝ？」

「あなたの『二つ名』よ。まだ聞いてなかったし。ちなみにあたしは『微熱』。タバサは『雪風』よ。」

キュルケの質問に暫し考え答える。

「あゝ、無いな。うん。」（前に使ってたのならあるけど、あれを名乗ったら手が後ろに廻るしな！。）

「なら、あたしが付けてあげる。そうねー、『変態』のギーシュはどう？」

「蝶却下。」

「なによ？ピツタリじゃない！」

「アホかおまえは！？」

睨み合う二人にタバサがボソツと声を出す。

「『独眼』。」

「『へっ？』」

「あなたの創るゴーレムは、形は違っけど全てが一つ目という共通点がある。だから

『独眼』。」

（どこの筆頭ですか？それは。）

両手に六本の刀を持つバサラな侍のコスプレをしている自分をイメージし、意外とイケルんじゃない？と考えるお馬鹿なギーシュ。

「『独眼』のギーシュねー。なんだか名前負けしそうな二つ名ね。」

「俺は気に入ったぜ！ありがとうな、タバサちゃん。」

「・・・」

感謝の言葉を受け困惑するタバサ。そんなタバサをみて微笑みながらギーシュに問いかけるキュルケ。

「なんでタバサには、『ちゃん』付けなのよ？」

「ならキュルケも、『キュルケちゃん』って呼ぼうか？」

「遠慮しとくわ。」

嫌そうに答えるキュルケに、ギーシュは二人から数歩前を歩き、くるりと二人に振り向く。

「なあ、話は変わるけど二人ともどうする？ヴィリエの奴があきらめたとは思えないし。そこで提案なんだがダラーズに入らないか？」

「ダラーズ？」

キュルケにダラーズのことを簡単に説明する。

「ふーん、面白そうね。いいわよ、入っても。タバサもいいわよね？」

「・・・わかった。」

少し考えてから返事をするタバサ。

「よっしゃ！ありがとう！！」（これでルイズも入れば・・・うひひ、楽しみだなー）

「ねえ、ところで」

「ウヒヤアアアアアアアアアアアアアアアア！？」

「「「「ウオオオオオオオオオオオオオオオオ！？」「「「「」

「「「「ウソオオオオオオオオオオオオオオオオ！？」「「「「」

キュルケがダラーズのことと訊ねようとしたら、食堂のほうから大勢の絶叫が鳴り響く。

「なに！？」

「・・・!?」

驚くキュルケとあたりを警戒するタバサ。しかし、ギーシュだけは違う反応をする。

「あ！忘れてた〜！」

「・・・なに？」

訝しげにギーシュをみるタバサ。

「ふふふ。実はねー、俺のハニーが作った秘薬の実験をやったんだ。本当は女の子に飲ませる物なんだけど、どんな副作用があるか解からないらしくて。それなら男に試してみようと俺は考えて実行したのだ！」

「・・・勝手に？」

「そうだよん！」

タバサの問いにケロつとした顔で答えるギーシュ。

「ギーシュ・・・あなたって」

「・・・鬼。」

一歩引きながらギーシュを見る二人。

「何を言う！もし副作用があつて女の子に傷をつけたら男が廃るつてもんだ！！そのためにマルの一人や二人や百人犠牲にしたつてかまわんやろ？」

そう、モンモランシーの暴走を止めるためにマリコヌルが尊い犠牲になってくれたのだ。どうやって飲ませたかというと、メイドの一人に頼み込み（+依頼金）で、マリコヌルの飲み物に混ぜてもらったのだ。ありがとうマリコヌル。

「さてと、腹も減ったしマルがどうなった見に行こうぜ！」

食堂に駆け出すギーシュ。残る二人は呆然としながら立っていた。しばらくしてからタバサが口を開く。

「彼が黒幕でないと推測した最後の理由がある。」

「聞かせてちょうだい。」

「彼はあのような計画をねるタイプではない。どちらかというと物事を深く考えないタイプ。」

「それって馬鹿ってこと？」

「・・・そう。」

「はぁ、あんなのがいるならダラーズのリーダーって器が大きいのか、それとも同じような馬鹿なのかしら？」

「・・・彼がリーダー。」

「入るの間違ったかしら？」

「・・・同感。」

「なんで効果が現れないのよー！！！」

実験をした日の深夜、金髪ロールの少女が自室で怒声を上げている。見事な巨乳になったマリコヌルを調査し副作用は特になかったため、タバサを含め胸に自信の無い娘達はモンモランシーの秘薬を求め奪い合い、なんとか全員に行き渡り服用した。

結果は御覧のとおりだが

「うーん、なんで効かないんや？同じように飲んだのに？」

「わかったら苦労しないわよー！！」

「やっぱあれか？マルの奴だから効果があつたんかなー」

「そんなこと・・・ありえるかも。」

ギーシュの言葉に何故か納得するモンモランシー。

「うう、せっかくギーシュに喜んでもらおうと思つたのに」

「なあ、ハニー？俺は、胸が大きい娘は確かに大好きや、でもなハニーの胸も大好きなんや！」

「ギーシュ、でも」

「それに秘薬で大きくするなんて反則だ！大きくなりたいなら俺がしてやる！さっそく今夜から頑張っちゃうよー！！」

「・・・ばか／＼／」

バカップルの夜はいつもこんなものである。

「・・・うふふ、イザベラに勝つた・・・すう、すう」

秘薬を飲んだ後、すぐに寝入ったタバサは知らない。

従姉妹姫に勝った夢を見ているのだろうか、朝、目覚めた時現実に耐えられるだろうか・・・

「胸が、胸が・・・はぁ、はぁ・・・」

マリコヌルの部屋からとても気持ちの悪い声が聞こえる。

なにをしているかは、誰も知らないし知りたくも無いであろう。

ちなみに、マリコヌルの胸は一ヶ月後に元に戻るが、その間、女生徒からの冷たい視線で更なる進化を遂げたのだ。

祭りの前の馬鹿騒ぎ（後書き）

学校の体育館のステージ

演劇用の幕が張っており、スルスルと開いていく。

ギ「どうも！ 今作主人公のギーシュです！」

サ「原作主人公のサイトです。」

ギ「サ」「二人合わせて！！」

ギ「ハートキャッチ！プリキュアですーすー！」

サ「なんでだよー！？」

ギ「しまった！一人足りない！」

サ「そこじゃないだろ！コンビ名としておかしいだろ！？」

ギ「まあ、それは置いといて」

サ「置いとくのかよ！」

ギ「今回の話でサイトがくる一年前の話は終わりまーす」

サ「おっ！？ということは？」

ギ「次からは原作1巻に入る予定でーす！」

サ「よっしゃー！」

ギ「おや？なんでそんなにうれしそうなんだサイト？」

サ「当たり前だろ。次からは俺が出てきてルイズと出会って冒険の始まりだぜ？二次創作とはいえやっぱうれしいだろ」

ギ「あー、そんな気分にな水を差すようで悪いけど、お知らせがありまーす」

サ「なんだ？」

ギ「出番ないかも」

サ「は？なんで？これ、元ネタはゼロ魔だろ？ゼロ魔といえば俺とルイズだろ？」

ギ「理由があるんですよー理由がー」

サ「なんだよ理由って？」

ギ「ゼ口魔の19巻でたじやないですかー」

サ「出たよ？それがなんだよ？」

ギ「そこで君は見てはいけないものを見てしまったのだよ！」

サ「え？なにそれ？19巻でいったら俺とテファがエルフに攫われて、エルフの国から脱出しようとして、いけ好かないエルフと戦って、その途中でデルフが復活して・・・」

ギ「どうした？続けるよサイト」

サ「えーと、まさか・・・」

ギ「その。ま・さ・かだよ！」

サ「はあ！？そんな理由で！？」

ギ「ばかやろうー！！」

サ「いでええ！？」

ギ「てめえが見てしまったものが、どんだけスngoイものかわからんのか？あのシーンの挿絵が無く血の涙を流した全国五千万の読者に謝れ！」

サ「知るかボケ！大体、おれが出ないとして誰が出るんだ？いまさらオリキヤラか？」

ギ「候補は出ている」

サ「あるの！？」

ギ「うむ。とある“幻想殺し”をもった不幸な」

サ「ちよつとまてえー！他作品どこるか出版社も違うじゃないか！
！」

ギ「しかし、問題があつてなー」

サ「だよねー。その手のネタはもうあるし。やっぱおれが」

ギ「いやいや、作者は狂がつくほどの上条×美琴派でなー。上条さんと美琴をこんな作品とはいえ、離れ離れにしたいくないと」

サ「どうでもいいー！」

ギ「バカヤロウー！！」

サ「またあ！？」

ギ「作者はな信じているんだ！真のヒロインは美琴であると！！最後は上条美琴になると信じているんだ！！！」

サ「あー、もうわかったよ。それで？候補であって確定じゃないんだな？」

ギ「まあ、そうだな。作者がなにをするか作者自身まだ決まっていし」

サ「大丈夫なのか？てかいいのか？仮に上条さんが出たとして、これはお前が主役だろ？」

ギ「俺は作者の分身みたいなものだ。上条さんが出るなら主役を譲ってもかまわん！」

サ「あー、そう。ん？カンペ？」

ギ「なんだ？」

サ「時間も無いので一発ギャグをやれって書いてる」

ギ「なんかネタあるか？」

サ「急に言われてもなー」

ギ「しゃーないなー。ここは一つ俺が。あーゲフンゲフン」

ギ「ルルーシュ！」

サ「中の人ネタかよ！」

ギ「サ」「どうもありがとございました！！」「」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3985m/>

転生！？ギーシュ・ド・グラモン珍道記

2010年10月8日15時00分発行